都市の風景

PES建築環境設計代表取締役／
日本グリーンビルディング協会副会長
石黒隆敏

プロローグ

アメリカには、あらゆる気候区が存在する。世界中の民族が混在して住んでいる。

生きるための糧を得るためのあらゆる職業が存在し、原始から近代までの文明に浴することができる居住が選択できる。

それは、「生物の多様性」そのままの形が、巾広い地理的特性の中で、生態的に実現されていると考えられる。

アメリカ人は移り住む、多分人生という大きな流れにのって折々に訪れる節々の岸で、時に応じた目的を達成し人生を終わる。その訪れた岸（住んだ街、家）を離れてもその岸は又、次の訪問者を迎えるべく模様替えして活気を失わない。

家族の人数に応じて、その構成する年代に応じて、そして又、その生活の源を得る職業に応じて、人々は住居の広さを選び、住む周りの環境を求め、のぞましい地域に移住する。一度建てられた建物は、住み手が代っても絶えず時代の要求からはずれていなければ、レトロフィットし、リセールのマーケットで価値が評価され、価格を上昇されながら生きつづける。そして人々は個性を損なうことなく各々の人生の時々に、群れをなして住んでいる街（コミュニティ）から最大の収穫（よろこび、かなしみの共感）を期待し、獲得しようと努力する。無機質の街並みやインフラは人間臭いイベントや工夫を受けいれる器として利用され、人々は、有機体と化した生命力あふれる街と一体化して生きている。

その典型たる街、ニューヨーク市に最初住んだ2年間から、この魅力あるマンハッタン島を訪れ続けて35年間が流れている。

初めに見た建物や街路が変わることなくそのまま存在し続けている風景の中に、様変わりした様子も見られるが、相変らず存在感のある街中を走る道路を舞台に人間主役の劇が演出され、折々に観客を感動させ、陶酔させ何かを示唆してきている。

そんな体験の一つずつが、都市や建物のハードと、それに係る人間の様々異なる各々の情景というソフトによって、如何に生命にあふれる物になったかを実証させて見せてくれている。都市の内に生まれる事件のどれもがいつも人間と自然が主役であることを私の記憶の中であらためてよみがえらせてみる。

住む場所を選ぶ

ワールドトレードセンターが、大きなガラス窓のサッシュの額縁に囲まれて心地よく納まって見える場所をこの街の泊まり宿に選んでからもう15年近く経つ。10階の窓からは、バルコニー越しに8番街をアップタウンに向けて走るイエローキャブの列が生きもののように見え、時折、救急車のサイレンの音や、人々の叫び声まで生きている証を知らせて耳に快くひびく。ストリートを挟んだ向かいの低層アパートの屋上は、時に人々が集まるパーティ場になり、犬と人との遊戯場にもなる。この建物の外壁に設けられた火災避難用の階段の踊り場にピクニック用の敷物が敷かれる日には、ワインや料理を囲んで仲間達の歓談がはじまるのが見える。

イーストリバーからの日の出の光を左側に浴びてゆっくりとピンク色に染まってやわらかい姿を見せるワールドトレードセンターのツインタワーは、昼は鋼そのもののメタリック感にあふれ強さを誇示して光り輝く。ダストの中の夕暮れは、ハドソン川の向こうに消える太陽に照らされてその右側を濃い赤色に染めて日中の光のショウを終えていく。そして、暗闇の中に、夜を徹して点々とあかりの黄色を散りばめて静かにたたずんで朝を迎える。こんな風にふたごの建物が生きているのを見ることが毎日のご馳走だと、このマンションを選んだのは正解であった。

そして、ワールドトレードセンターが消えた。

ぽっかりと空いてしまったスペースも、以前このご馳走を味わったことのない人ならば、なんの懐かしさも違和感もなく受けいれられるだろう。そして、相変わらず存在するイエローキャブの流れも、犬の散歩も避難階段のパーティーもブロードウェイのロングランの人気のミュージカルの舞台を見に出かける観客のようにこれを見る人の心をとらえ続けている。

そして別の場所6番街に面した23階のアパートの窓からは、エンパイヤステートビルとクライスラービルの雄姿が屋上に置かれたとんがり屋根の形をした木製（オーク）の水槽が点在する光景とマッチして目を愉しませてくれる。そして雨の日や雪の日には、全てがふっとかき消えて、人は思索の世界に誘われる。晴れた日の夜には、尖塔を照らし出すライトアップを競い合う建物群は、空一面のパノラマショウで人々を魅了する。

エンパイヤステートビルは、日毎にそのライトアップの色彩で夜の空をいろどり、三層に色分けして人々にメッセージを送る。今日は、一体何の日だろう？今週は、何の週だったろうかと？「クリスマス」おめでとうの緑と赤は見慣れた配合だが、乳がん撲滅のピンク色やバレンタインデーの赤、勿論セントパトリックデーは緑とわかりやすいが、黄金色はアカデミー賞、青と青の日は、エンパイヤステートビル階段かけ上り競争の日と知る。

他に、白あり紫ありオレンジ色ありのとりどりの色で、夜空を見上げる人々の目にエンパイヤステートビルは、毎夜都市に住む魅力の何かを語りかける。

仲間を選ぶ

1994年6月ニューヨーク市は、世界中からゲイ、レスビアンの人達を迎えてゲイ、レスビアンの権利が認められた25周年を祝っていた。

25年前ニューヨーク市のグリッニッジビレッジにある「ストーンウォールイン」（宿屋）の1階にあるバ

ーは、ゲイたちの溜まり場であった。そして1969年6月28日、そこへ暴動があったとして警察が侵入し、彼らは反抗し、5日間立てこもった。これはその後のゲイ、レスビアンの権利を勝ち取る記念すべき行動の始まりであった。今も「ストーンウォール」は、彼らの象徴としてグリストファーストリートに誇らしげに現存している。

そして、25年後の6月26日日曜日。当日の最大イベントは、マンハッタンの東端を走る1番街にエイズ撲滅のキャンペーンのためにも作られた長さ1マイル（1600メートル）のバナー（旗）をダウンタウンからアップタウンに向かって道巾いっぱいにに拡げながら行進するというものであった。この旗が、少しずつ拡げられていくに従って旗の両端に人々が集まり支え持ち、その旗の中央の緩んだ部分に人々は思いを込めてドル札やコインを投げ込んでいた。そして、GayPrideを表す虹に似た6つの色あざやかな1マイルの長さのバナー（旗）は、拡げられるにつれて吹流しのように1番街の道巾一杯にダウンタウンからアップタウンへの道を順次染めあげていった。1マイルの長さの旗が拡げ終わった終点の59丁目では、道巾一杯の旗は、少しずつ横にはさみで切り離されてそれを欲しい人達に与えられ、参加者は三々五々、ある種の充実感と満足感に満ちて、そぞろ帰途についたにちがいない。

この時、普段は無機質な自動車道は、バナーの縁をしっかりと手に支えている人々の歓声と共に生命のみなぎる生物に豹変していた。

この旗は、私の住んでいる8番街に面した17丁目のアパートの1つ上の階、11階の住人が発案し、この建物の地下1階で多くのボランティア達によって製作されたもので、裏口の16ストリート側から運び出される光景をテレビ中継されたことは、彼らにとって大きな誇りになっていた。

時を同じくして行われた「ゲイオリンピック（GayGames）」では、世界中から集まったゲイ、レスビアン達が陸上にバレーボールに自転車にそして、トライアスロンにとその力と技を競い合い、セントラルパークを中心としたマラソンには、700人を超える男女が朝の6時にスタートラインに並びフルマラソンを競走した。見物に訪れた旅行者は、延べ50万人、ヤンキースタジアムに人々は集まり、互いに力を競い合って金、銀、銅のメダルを目指した。そしてそのウィークの8番街は、14丁目から23丁目にわたって、世界中のゲイ、レスビアンが散歩し、ショッピングする交歓の場となり、競い合った結果の金、銀、銅のメダルを各々首から胸にさげて語り合う人間の姿は、建物のハードだけでは決して演出できない魅力ある空間に人々を誘い、そこは熱気のほとばしりにあふれていた。

ストリートフェアと蚤の市

このような特別なイベントでなくてもニューヨークの街がこのように人間臭くなるのは、週末に絶えず所をかえて行われる各丁目毎のストリートフェアで見ることができる。

自動車交通を遮断した通りに終日、日本で言うところの飲食の屋台や小物の露天や占いの出張サービスと、様々な人間模様で、活気ある市場が出現する。

訪れる人と売る人々との心の交流が犬たちまで仲間にして行われる。こんなイベントに街路は生きている証を見せてくれる。

ウィークデーは、ぎっちりつまった車で一杯で駐車場以外の何物でもないスペースが、土曜日と日曜日のウィークエンドには、アンティークや掘り出し物の蚤の市に一変する。訪れる人を惹きつけゆったりと活気を呈する場。買う楽しみもあるが、昔使われた骨董の上等品とは言えないまでも、ある懐かしさのある品々を、手にとって実感するだけでも1時間2時間をすごすのが愉しい週末のやすらぎの価値ある一時である。

週末の公園横の広場は、近郊からのいびつな形の農作物に人の群がる市場（グリーンマーケット）にもなる。道路にしろ駐車場にしろ一つの機能だけで街の中に存在するとしたら、それは無味乾燥そのままで、怠惰な果て何もしないで過ごすのはそ

の街の死を意味する。街への思いやりが、大きく強ければ強い程人間の限りないあこがれや、夢想を実現して見せてくれるのに、よりふさわしい舞台として街は、生きる歓びにあふれて存在する。

パレードの主役は通りと人々

パレード好きの人にはたまらないのが、街並が行列のプロムナードに変わる日々である。

パレードは、朝から晩まで一日中続くときもある。春のイースターやその前触れ3月のセントパトリックデイは5番街を賑わせ、ブロードウェイは、サンクスギビング（勤労感謝の日）の主役だし、アースデーの催しはマジソン街で地球環境の重要さを人々に語りかける。このように全ての通り（アベニュー）は、パレードや催しを主催する資格を有し、その都度一日中、通り（アベニュー）は車を拒絶し人間の足で歩く尺度に支配されるゆっくりとした動きの世界に全て様替りする。

何といっても特別になるが42丁目で行われた1969年の最初の月着陸の三人の宇宙飛行士のパレードにまさる興奮を覚えた時はない。狭いストリートに並んで建っている見上げるような窓々から投げられる紙吹雪は、細かく散って吹き上げられ流されるコンピューター用紙のパンチくずや、長くたれて帯となって落ちるトイレットペーパーまでも含んで、まさに人間が建物と通りに生命をそそぎ込んだ瞬間を連続して見せてくれた。

パレードは、昼とは限らない。10月31日ハロウィーンは6番街の仮装行列で、見る人も歩く人も一体となって夜の闇に飛び交うホタルの様なかわいらしく時には不気味な光の踊りを愉しむ。

夜の特別なイベントとして、ディズニーのエレクトリカルパレードがタイムズスクエアから出発して、42丁目を経て5番街をアップタウンに向けて行われたことがある。

この時両側に立ち並ぶビルの全ては、ライトを消してそのパレードを見るために集まった人々をもてなした。

唯一つのビル「ヴェルサーチビル」のみがライトをつけていたので、人々は声を合わせて「ターンオフ・ザ・ライト（灯を消せ）」と叫んでいたことを覚えている。これさえも一瞬のうちにそこにいた人々が溶け合い、パレードを待つ間に演出する。

集まった人達が、何を期待し、愉しみにして集まって来ているかを知れば、それにどのように協力しもてなすべきかは、おのずから解るというものだろう。コミュニティの一員として、人は果たすべき責任と姿勢を自覚する。

ストリート芸術家達

ある日壁一面に現れる壁画は、20階30階を塗りつぶして人々の目を楽しませる。

直接塗られていない壁面には、屋上から地上まで布に描かれた絵で飾られて遠くから眺めると実際に塗り上げられた物とそん色なく輝いて見える。街は、絶えず建物の外装のメークアップを新しくして変化ある風景を演出する。

歩道をどれだけでも巾広くできるキャンバスにして自称の画家達はそこで黙々と自らの作品を仕上ていく。そして、また、街角にたたずんで陽に映える摩天楼の建物を背景に通行する人々に語りかけ、演奏するストリートミュージシアンたちは、夜のネオンの点滅の中に浮き上ったり、消えたりして彼らの聖なるステージでの一日を終える。

また、音楽の殿堂リンカンセンタ

石黒　隆敏（いしぐろ　たかとし）氏プロフィール

PES建築環境設計代表取締役／日本グリーンビルディング協会副会長
一級建築士、建築設備士、建築設備検査資格者
日本建築家協会会員／日本設備設計家協会会員／愛知県設備設計監理協会会員／全米グリーンビルディング協会会員
1962年・名古屋工業大学建築学科卒業／1967年・同　大学院修士課程修了
建築設備設計、地球環境に良い建物の設計及び環境をとりまくコンサルティング業務を主に現在に至る。
1974年より20数年にわたり愛知工業大学の非常勤講師を勤めた。
【環境に関する主な経歴】
2002年／第4回地球環境グリーンセミナー開催（企画・実施）
2001年／愛知県　環境にやさしい公共建築整備基準　作成
2000年／「環境と経済」セミナー開催／2000年地球の日フェスティバル（アースデイ30周年）開催
1999年／「グリーンディベロップメント」監訳、出版
1998年／名古屋市公共建築物の環境配慮整備指針作成調査／日本グリーンビルディング協会設立
1996年／建設省　環境負荷の少ない官庁施設の整備手法の検討委員会　専門委員
1970年／第1回アースデー参加

ーの近くのブロウドウェー61丁目で戸外ピアノコンサートに出くわした日は、この街にまさしく幻影を見た思いであった。

建設用現場小屋が歩道の上に張り出し作られたその下に、雨をさけて少し傷んだグランドピアノが置かれ、きちんとした身なりの老人がピアノを弾いている。

通りすぎる人々は立ち止まり、耳をそばだて、目を見張り、この現（うつつ）とは、思えないような光景に誰もが凍結され、くぎづけされた。愉しげというより少し哀しげで、そして何よりも威厳ある音の響きが黄

昏のうすもやの中に消えていた。

翌日、もう一度聴きたいと出かけてみると工事用の青のビニールシートで覆われたグランドピアノはその上に、「5分後にもどります」と書かれた紙を楽譜のようにたてかけて主を待っていた。そして、数日して訪れてみると、跡形もなく消えてしまったグランドピアノの残像がまぶたにあざやかで、フェリーニの映画の世界にそのまま迷い込んでしまったような混乱の中にあって、得も知れないある種の恍惚感に浸っていた。

戸外を楽しむ

夏の夜の催しは、独立記念日のイーストリバーでの花火やセントラルパーク野外コンサートで昼の湿った暑さの不快さを夜の涼風で癒してくれる。

セントラルパークは、市民のために作られた人工の公園である。1400年の時を経て四季折々の変化は、一層自然となってその時々に訪れる人々を魅了する。

優雅に曲げられなだらかに作られた坂の上下がつづく、整備され舗装された道をはずれて、芝生を横切って繁った樹木の間に入りこむと、馴れた人ですら次第に不安におちいる。

野蛮で、不思議な迷宮を含んでいる。どんな寒い冬でも雪さえなければ、誰かがジョギングしている道、春の日曜日は、ローラースケートや自転車がそれに加わりにぎやかになり、夏になればピクニックの場となって、コンサート、オペラ、芝居の文化の殿堂となってが戸外で人々は開放され自由な気分を満喫する。戸外オペラやコンサートは6月7月の毎週、ニューヨークの3つの公園を巡って開かれる。まだ明るい8時に始まりやがて暗くなるにつれて星空の下で、メトロポリタンオペラ劇場の一流の歌手によるオペラやニューヨークフィルの生演奏は、草の上に座ったり寝そべったりして、並べたワインや食物の饗宴を愉しみながらその一方で音楽というご馳走に耳を傾けている10万人の聴衆を心地よく酔わせて魅了している。

イーストリバー沿いに打ち上げられる花火は横に巾広くパノラマ展開して、6つ7つ並んで同時にはじけて夜空を染める豪華さで、高層アパートの居住者への夏の夜の特別な贈り物となる。

高層ビルからの眺めといえば、雷の日に空を破る稲光が引き寄せられるように、エンパイヤステートビルの先端に流れてすいこまれるのを見る興奮を、高層ビルの窓越しに味わうのも都市の醍醐味である。

人が集まれば必ず要る物が便所である。街中で催し物があれば、仮設便所がその規模や場所の拡がり、集まる人数の予想に応じて前日からずらりと並んで用意される。

人々は、既に前の日に明日の催しの予告をされていることになる。便所と言えば、貸ビルの事務所で働く人達は、鍵を用いなければ各々の階にある共有の施設としての便所を利用することができない。街中で自由に使えるところを探すのは決して容易ではない。

旦っては、固定の公衆便所が用意されていたばかりなのでその数は少なく、何か屋外での催し物がある度に休憩になると長蛇の列をなしていたものだが、近頃は移動便所の出現で格段の便利さを与えてくれている。

エピローグ

利己的に振舞うばかりでもなく、一方利他的に行動することが可能な動物でもある人間は、その「行動」「振舞い」によって全ての生物と自然の中で共存して生活しなければならないコミュニティの「質」を作りあ

げていく。

「人間は、優れた知能に由来する激しい攻撃性を有する霊長類にして食肉類」と辞書には書かれている。そして、人間こそがあらゆる生物の中で最も獰猛なテロリストであり、人間以外の生物を一掃し絶滅させて来た事実は否定できない。

「戦争の目的は、戦争を消滅させることである。それは撃潰戦でなく殲滅戦でなければならない。」とは毛沢東の言葉だが、人間にとって「戦いの能力」は生きるために食うという要求を満たすために、どうしても鍛え上げ保持し、失ってはいけない必須のものなのかもしれない。そして、何よりも激しい情熱で敵に向い合う精神を時には挑戦と呼んで高く評価されても来ている。たとえそれが破壊につながるものだとしてもである。

同時に「戦い」とは別に、人間はコミュニティに生きることから共有して得られる芸術や文化や遊戯に身をゆだねる創造性の高い世界の中で、はるかに深い満足感を得たいとも願っている。「破壊」と「創造」が寄り添うように生きなければならないというのは、地球上の掟かもしれない。

人間が住んでいる自然はいつも循環し変動している。又、生命の許される巾の中で浮遊し緩急の流れに身をおく心地よさを人間は本能的に知っている。太陽の恵みは光による明暗をある規則で繰り返し、温度や湿度の変化は夜と昼の違いを皮膚に生々しく実感させる。

そこに起こる風や雲の流れは、雨となり嵐を呼び雪を散らすが、すべて連続一定したものではなく、いつも「間」という節でつながる一連のものとして人々は理解し、享受している。都市は無機質なハードであるがそこに住む人間はこれらを英知や本能で有機的なものに変換し、このような自然が作り出す環境の中に存在することを喜び、それら全てと共生することをいつも願っている。

（いしぐろ・たかとし）